

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

『日本外交の在り方を解く』

イラクに対する核査察問題、北朝鮮の拉致問題がさかんにとりあげられている中で、日本も国際社会の一員として国内の派閥争いなどに終始するのではなく、国際的にどう対処すべきなのかということに、今更ながらではなくやはり目を開いていく必要があるのではないのでしょうか。実際に今年五月に発生した中国の瀋陽の領事館問題への対処にも非常に疑問に思われるところがありました。そうしたことから質問がありました。

その時、先生がお答えくださったところをビデオ撮影しておりましたが、これからの日本にとって大変に重要な内容でしたので、今月は急遽その内容をお送りいたします。最初は、中国総領事館の問題に見えるその背景からはじまり、そして、今の外交姿勢の誤りと日本がこれから世界にどう相對していくべきかをお話し頂いております。

最初に藤原先生からのメッセージをお送りいたします。このメッセージから、なぜ今『蘇れ 日本人』なのかを感じて頂きまして本文をお読みください。

日本には世界に冠たる国としての期待が残っているのです。アインシュタイン博士の言葉を皆さんにお伝えしたいと思います。

『世界の未来は進むだけ進み

その間幾度か争いは繰り返され

最後の戦いに疲れる時がくる。

その時、人類は真の平和を求め

世界的盟主をあげねばならぬ時が来る。

この世界の盟主なる者は武力や金の力ではなく

あらゆる国の歴史を抜き超えた最も古く

また尊い家柄でなくてはならない。

世界の文化はアジアにはじまってアジアに還る。

それはアジアの高峰、日本に立ち戻らねばならぬ。

我々は神に感謝する。

天が我々に日本という尊い国を

創っておいてくれたことを』

この様に日本の役目という物は非常に大事な物を持っているのです。世界は日本にそれだけ期待をしているのです。現在のような日本人であっては、世界を指導統率する事などとも及びませんが、世界は逆に日本にそれだけの期待をしているのです。

早く『蘇れ 日本人』として、日本人自身がそういう自覚を取り戻し、アインシュタイン博士の期待を裏切らないようにアジアの高峰、日本に立ち戻って行わなければならないのです。それだけに『蘇れ 日本人』としてこれから普及をしていきたいと思っております。

質問者 先だつての瀋陽の総領事館への亡命問題のことですが、あの女性の方は一旦、領事館の敷地へと入っていますけれども、その方を中国の警官もまた敷地へ入って外へ連れ出していたと思うのです。

治外法権である以上、あの方の亡命は成立していると思いが、日本人側はまるで他人事としてみていたと思うのです。けれども北朝鮮へ送還されたらどういう事になるかはあの必死さを見れば想像できますし、そもそも治外法権というごく当然のことについて、日本側のあの対応はどうも納得できないのですが、一体どう理解したらよろしいのでしょうか。

けじめの無さが 問題を生む

師 本当に不可解と言うか不甲斐ない場面でしたね。何かあった時のことを、普段に「そういう時は頼む」と言っているという事が前提にあるのでしょうか。だから、普段に頼まれているから、ここに何かあってはいけないと思つて、向こうの人は勢い込んで入っていったのではないかと思ひます。だけれどもと極端に言うと、領事館の中の椅子にまで座っているわけでしょう。中に入つていつてね。それは普段にそういう風に頼んでいるから、だから向こうは「してやったのに何だ」という事でしょうね。

つまり、けじめがないのです。「ここまでは頼んだよ。しかしそれは道路までだよ」と。「中へ入ったら治外法権なんだから」というのはお互いに当たり前で分かってきつてのことだけれども、普段あまりにも親しくしていると、ついポツと中まで入つてしまふ。

普段がそういうところだったから、中へ入つていつて「いや治外法権だつて知つていよ。だけれどあなただつて俺のところへ来るし、俺もあなたのところへ普段から行つていよじゃないか」という、それが前提にあるのではないのでしょうか。

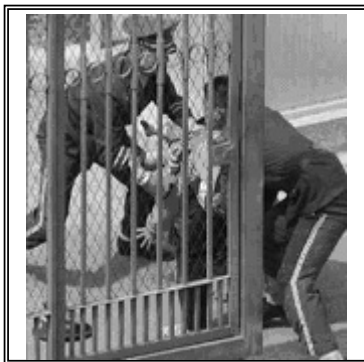
そうすると向こうの人は本当に悪いとは思つていないのです。「俺はしてやったのに、何であだこうだと言うのだ。そんなことならもうしてやらないよ」という事になるのですね。それがけじめなのです。

きちつと「道路までは頼むよ。私とあなたは個人的には仲良くしたいと思ふけれど、しかし、これは国の問題だから、やはり治外法権の中へ入つては駄目だよ」というけじめを普段にしておけばよいのだけれどもね。

そのけじめをしていないで、お互いに日常において馴れ馴れしくしていると、問題があつた

右の写真：すでに女性が領事館の中に入っています。中国警官も中に入つて連行していきました。

左の写真：領事館の職員も駆けつけて来ましたが、まるで門外漢の様子です。



時になあなあになってしまうのです。

全体のたるみが表出した

だから、領事館に居た日本人も「何をやっているの？」ということでもボケーンと見ているのです。そういうことを前提にしないと、理解できませんね、国民としては。だけど、そういう前提があるのだとすると「ああ、そうか」と理解できなくもないのです。

公務員全般がたるんでいるのです。私も内閣に行くときにそうでしたから。「内閣へ行って私は何をしてくればよいのですか」と聞いたたら、「まあ、今まで大変だったから、少しゆっくりしていらっしやいよ」と。そういう送り出し方をするのです、実際に。だから私は身に覚えがあるのです。「この人もそう言って送り出されたな」と。だけど、それを鵜呑みにしてそれに乗ってしまう方がいけないのですね。

やっぱりそこへ行ったらそこへ行つた用事があるのですから。外務省などは特に領事館なんつていうと、領事館としての用事があるのだから、送り出される時はそう言われたとしても、自分は公務員なのだから、そこへ行つたら仕事をやろうという自覚をもつて行けば問題はないと思う。

往々にしてそういう送り出しをするから、「そのつもりでいいんだ」と思ってやっていると、こういう問題が起こるのです。残念ながら、この人はもう出世コースから外れるけど、外れてもよいものね、国民の側からしたら。けしからんと思う。「何が副領事だ」ということになる。

質問者 はい。そう思います。その省庁の中で出世コースから外された理由は、国民の反感を買ったからということなのですね、多分。信義でも正義でもなんでもなくて・・・。

師 そう。だから、何をやって駄目だったのかと言うと、「国民にあれだけ騒がれたらまあ無理だよ」ということだよな。「運が悪かったな」なんていうね。やはり、そういう前提をきちっとしないと駄目です。それだけ逆に言うと日本人がなまってしまったのです。やはり外交交渉というのは、それこそきちっとけじめをつけておかないと、いざという時にやられるのだという。そうでもなくとも、外国というのは、グリム童話で言ったように、相手を騙してでもやつつけようということを経験に来るわけだから、外交関係というのは。

相手が日本人の時には勧善懲悪的なことで、あるいは、良いことをしてあげれば、良いことが返ってくるよという、そういう考え方をとるけれども、外国は騙してでもそうやって、食事の出る布と兵隊の出る背のうとを取り換えたら、すぐに兵隊を出して食事の出る布を取り返せと命令し、「宝物を二つ獲ったぞ」という主義ですから。そういう民族性の違いというものが、では歴史上どう顕れたかということを考えたらよいのです。

日ソ不可侵条約を正視する

第二次世界大戦の時に日ソ不可侵条約というものを結んでいた。一方では、日独伊三国同盟(第二次世界大戦にあたり、日本・ドイツ・イタリアが一九四〇年九月に締結した軍事同盟)がある。それで、ドイツはヒットラーがポーランドの方からモスクワの方へ攻めて行くから、